

〔第31回学術集会 特別講演〕

お産の現場から家族の魅力を探る —その変わらぬ自然な営みとは—

湘南鎌倉総合病院産婦人科

井上 裕美

瀬戸内海が見える高台に私の父母を含む何代かに渡る家族が今眠っている。その和尚さんが湘南の我が家を訪れた2024年5月の話である。「現代の人の「死生観」が変わって来ているのでは」と話されたのは、産婦人科医とお寺さんの立場で、世間話をし始めたからだだった。ちなみに広辞苑によると死生観とは「生き方・死に方についての考え方」とされる。

この世に生まれ、そして今の医療がどんなに頑張ってもお迎えはいつかやってくる。この間に、我々は一般には家族に育てられ、いつか誰かを好きになり、一緒にいたいと思い、結婚し、そしてまた新たな家族が誕生する。そして妊娠・出産を前提とした話ではあるが、子供を育て、いつか自らは他の世界に旅立つことになる。人類がこの地球に生まれてから延々と続いている自然の営みである。人類の皆、母のお腹の中にいた時期があった。そこに人々の生き方が深く関与する。

朝ドラ「虎に翼」(2024年NHK)の主人公寅子は一人前の弁護士として見てもらいたいからと言って結婚する。しかし初め相手に友人以上の感情を持たなかった寅子もある時急に好きになり、そして妊娠する。時代は戦前。「人間は結婚して初めて一人前になる」という考え方が当時の男女の意識の中にあった。時代と共に変わる男女の意識は結婚観を変え、2020年までの40年間で未婚の割合は大幅に増加し、50歳時点で男女の未婚率は約30%となって

いる。今や結婚は人生の自由な選択としてあるように見える。当然のように出生数は減少し2024年は72万988人と過去最低となった。

一方で寅子の急な気持ちの変化は自然な営みとして哺乳動物でもある我々がずーっと持ち続けているものだ。しかし昨今気になるのは、時代を反映する男女の意識の変化が原始的な営みである男女の関係にまで影響を与えようとしていることだ。そしてそれは、妊娠・お産に対しても影響を与えているように思える。お産が人生に与える影響は途方もなく大きい。社会で必要な他者への気遣い、人々の絆に欠かせない「共感」はお産後の最初の母子関係で形成される(動物行動学者のFrans de Waalの「共感の時代へ」)。そんな大事なお産が現代の男女の意識下でマイナスの影響を受けているとしたらそれを取り除かねばならない。お産が痛いもの、辛いこと、その後の育児も大変。それに応えるかのように無痛分娩、産後の育児を支える環境は整ってきた。それでもお産が減り続けるのであればそれはお産に魅力がないからなのかもしれない。家族の始まりともなるお産を、意識化でのお産でなく、もっと自然な営みにもどしたいと思う。湘南鎌倉でのマタニティ坐禅や視覚的和痛効果を取り入れたお産は、そんな我々の気持ちを代弁している。そこでのお産で本来ある母子関係が生まれ、そしてあたたかな家族が形成されることを願うのである。